

CONTENTS

山岸俊男教授
紫綬褒章受章 ①

研究紹介 ④

一般公開ワークショップ報告 ⑥

2005年 研究成果 ⑦

お知らせ ⑧

山岸俊男教授 紫綬褒章受章

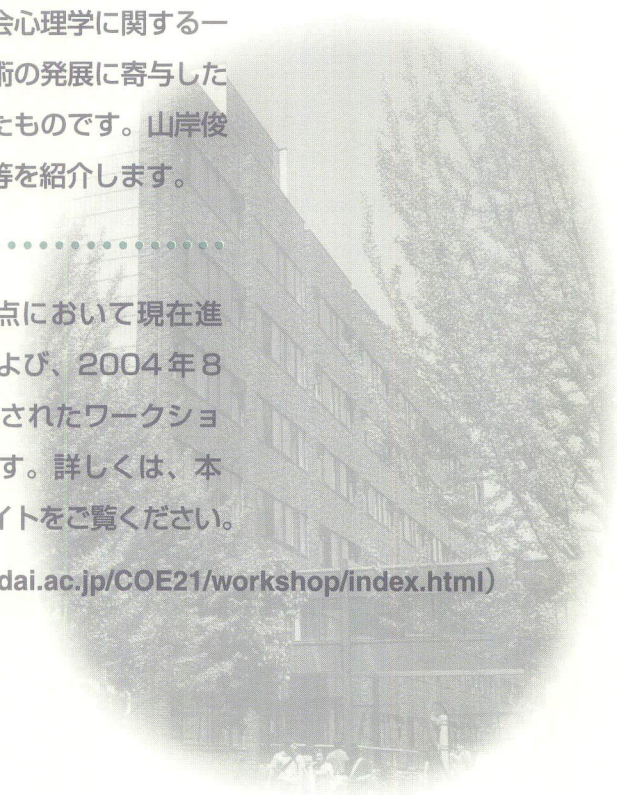


平成 16 年 11 月 3 日、北海道大学院文学研究科山岸俊男教授が紫綬褒章を受章しました。

これは、山岸俊男教授の長年にわたる教育・研究・特に社会心理学に関する一連の優れた業績と学術の発展に寄与した功績に対して贈られたものです。山岸俊男教授の経歴・功績等を紹介します。

また、本 COE 拠点において現在進行中の研究の紹介および、2004 年 8 月および 9 月に開催されたワークショップの紹介も行います。詳しくは、本 COE 拠点のウェブサイトをご覧ください。

(<http://lynx.let.hokudai.ac.jp/COE21/workshop/index.html>)



山岸俊男教授 紫綬褒章受章

平成16年11月3日、秋の褒章において、北海道大学文学研究科教授・山岸俊男教授が社会心理学研究により、紫綬褒章を受章されました。紫綬褒章は、我が国の学術研究や芸術文化、技術開発分野の向上発展のために顕著な功績のあった方々を顕彰するものです。

山岸俊男教授 紹介

山岸俊男教授は、昭和45年に一橋大学社会学部を卒業した後、同大学大学院社会学研究科修士課程に進学、昭和47年修士号を取得し、同50年からワシントン大学（米国）に留学し、昭和56年に同大学から哲学博士の学位を修得しました。

ワシントン大学在籍中は、社会学部助手、社会科学計量センター助手、同センター準研究員、社会学部準研究員、研究員を勤めました。その後、昭和56年に北海道大学文学部に助教授として赴任、昭和60年から3年半にわたりワシントン大学社会学部で助教授として過ごした後、昭和63年に北海道大学文学部に再度赴任をして、文学部教授、大学院文学研究科教授として現在に至っています。この間、Zentrum für Umfragen, Methoden und Analysen（ドイツ）客員研究員、フルブライト研究員、La Trobe大学高等研究所著名名誉フェロー、行動科学高等研究センター（Center for Advanced Study in the Behavioral Sciences）フェローを歴任しています。また、大学院生・学部学生の研究指導に精力を注ぎ、平成14年からは、21世紀COE「心の文化・生態学的基盤に関する研究拠点」のリーダーとして、同拠点の運営を支えてきました。

教授は、日本国内のみならず、世界的に見ても社会的交換理論の第一人者として過去20年多大な貢献をなしてきました。まず、70年代までは主に理論研究のみが行われていた社会的交換ネットワーク研究を、実験室実験による検証が可能なかたちに発展させ、その後の発展の基礎を築いています。特に、人々が埋め込まれているネットワーク構造により権力関係が規定されること、また様々なネットワーク構造の中で交換を行

うことにより公正判断がどのように規定されるのかについては、80年代終わりから様々な研究者グループが相互批判しつつ理論的・実証的研究を発展させてきましたが、山岸俊男教授はその中で中心的な役割を果たしました。

また教授は、80年代から社会的ジレンマの研究者としても世界的に注目を集めています。社会的ジレンマとは、集団の各メンバーが自分にとって利益の大きい行動を採用すると、集団全体としては利益が小さくなってしまいう状況であり、様々な社会問題（環境問題、社会秩序問題等）の根底にある構造です。たとえばそのような研究の例として、社会的ジレンマ状況での人々の意思決定には「他者は集団に対して協力するだろうという期待」が大きく影響していることを明らかにしたこと、またジレンマの解決法として従来考えられていた選択的誘因（非協力者に罰を与えること）の使用には様々な問題があることを指摘したこと、等が挙げられます。また、二者間のジレンマ状況である囚人のジレンマに関する研究においても、従来は特定の二者間に永続的な相互作用があることが暗黙の内に想定されていた限界を乗り越え、各行為者がゲームの相手を選択するという選択的プレイパラダイムを提唱したことにより、世界的に注目を集めています。

以上の研究成果の蓄積に基づいて90年代に山岸教授が精力的に研究を進めたのは、信頼に関する研究です。従来は、経済学における信頼研究は「信頼に足る行動をすること」についての研究、すなわち信頼される側の研究であり、心理学における信頼研究は「相手が信頼できるかどうか分からないときに信頼すること」についての研究、すなわち信頼する側の研究でした。教授は、このような信頼研究の二つの流れを初め

て統合し、「人はなぜ他者一般を信頼するのか」という問いに対する解答を与えました。山岸教授の「信頼の解放理論」は真に学際的な業績であり、社会心理学のみならず、社会学、経済学、政治学、人類学等、学問領域を超えて大きな影響を与えています。

90年代から山岸教授が信頼研究と並行して進めてきた研究は、文化についての研究です。なぜ世界には様々な社会が存在しているのか、それらは今後どのように変化していくのか、という人文・社会科学の根本問題に対して、従来の学問の枠組みを大きく超える試みを行ってきました。たとえば、80年代後半に提唱された進化心理学の成果を取り入れ、人間の心の働きは社会のあり方と不可分であること、すなわち、人間の心を社会生活を送るための適応の道具としてとらえ、また社会もそのような適応的な心を持つ人間の相互作用により支えられているというパラダイムを提唱しました。これにより、例えば日本社会とアメリカ社会では社会レベルで何が異なっているのかということ、日本人とアメリカ人の心の働きで何が異なっているのかということ、結びつけて考えることが可能となっています。またこのパラダイムでは、社会を均衡状態ととらえるため、あるパラメータが変化することにより社会とそこに暮らす人々の心がどのように変化していくかを、原理的には予測することが可能になります。従来人間の心は各文化によって異なるということを記述してきた比較文化心理学、及び人間の心の社会性を捨象してきた経済学・社会学・政治学の枠組みを乗り越えることを可能にする点で、教授の研究は国際的に高く評価されています。

このように、山岸俊男教授は社会心理学者として出発しな

がら、その分野にとどまることなく、様々な学問領域の知見を取り入れ、またそれらの領域に向けて研究を発信することにより、真に学際的な活躍を行ってきました。このような貢献に対し、著作や論文は、日本社会心理学会着想独創賞、日本グループ・ダイナミクス学会優秀論文賞、日本社会心理学会研究優秀賞、日経・経済図書文化賞、日本社会心理学会島田賞、日本心理学会研究奨励賞、日本心理学会優秀論文賞、William D. Hamilton 賞など様々な賞を受賞しています。また、学会活動としては、国際社会学会社会心理学部門理事、同学会合理的選択部門理事、アメリカ社会学会合理的選択部門理事、日本社会心理学会常任理事、日本グループ・ダイナミクス学会常任理事等を歴任し、国内・国外で学会の発展に多大の貢献をしてきました。更に、国際的なトップジャーナルである American Journal of Sociology, Social Psychology Quarterly, Journal of Personality and Social Psychology, Personality and Social Psychology Review, Rationality and Society等の編集委員を歴任、平成13年からはAsian Journal of Social Psychologyの編集副委員長も勤めています。

以上のように、国際学術誌等における教授の論文の引用数は2,000を越えています。山岸教授の研究活動は国際的に極めて高く評価されており、新たな社会科学が生まれようとしている現在、ますます教授の研究の成果が国際的に期待され



本COE研究拠点における 研究の紹介

北海道大学文学研究科教授

亀田 達也

不確実性をいかに低減するのか： 「心の社会性」と生態学的視点

不確実性やリスクという概念は、複雑さを増す現代社会の特徴を考える上で、欠くことのできないキーワードです。同時に、この概念は人間の社会だけに限定されるのではなく、生物一般の適応を考える上で極めて重要です。

例えば、気温の変動を考えてみましょう。私たちは現在でこそ寒暖の変化が予測可能な、比較的安定した環境（完新世）に生きていますが、人類の進化的適応環境と言われる更新世においては、大きな気候変動が数百年の間隔で頻繁に起こっていました。同様に、食物や居住資源の変動可能性も生存に直結する大きな要因です。多くの動物は、体内に脂肪を蓄えたり、体温調節の仕組みを進化させることで、こうした変動の影響をできるだけ低減しています。

さて、こうした不確実性やリスクへの対処法は、基本的に「個人による対応」と言うことができるでしょう。体内に脂肪を蓄えるのは、人が「タンス貯金」をするのと同じく、いざという時に備える個人としての対応策です。しかし、社会的動物である人間について見ると、不確実性への対処法は、個人による解決だけに限りません。むしろ、他者との関係を通じた、不確実性への「社会的・集会的対応」こそが、人間の適応に大きく役立ってきたと言えるでしょう。例えば、現在、争点となっている年金や健康保険などの社会保障の仕組みも、まさに、他者との関係を通じた、不確実性への集会的対応です。人類はこうした仕組みを、さまざまな社会制度として文化的に生み出してきました。

本拠点における私たちの研究チームは、人の心に備わっているさまざまな社会性（例えば、社会規範を作る能力、共感に代表される他者への感受性など）とは、つまるところ、不確実性への集会的解決を下支えする「心的装置」なのではないかと考えています。こうした観点から、社会科学のキーワードである、規範、社会的決定、文化伝達の仕組みを理論的に捉えな

おす作業を行っています。以下ではこうした研究の一端を簡単に紹介します。

“共同分配規範”の進化

多くの狩猟採集社会では、植物などの採集資源が近親者のみで分配されるのに対し、肉などの狩猟資源については、血縁を超えたグループ全体での共同分配が観察されます。血縁者同士の分配が動物一般に広く認められることを考えると、「なぜ非血縁者を含む共同分配が特に狩猟資源について行われるのか」という疑問が生じます。人類学者のKaplan & Hillは、こうした共同分配の仕組みが、資源供給における不確実性を低減する機能を果たしているのではないかと考えました。狩猟採集社会では、熟練したハンターでも獣肉を獲得できない確率がかなり高いという事実からすると、もし共同分配の仕組みが存在すれば、資源供給における不確実性（分散）を統計的に低減することができます。

私たちは、この議論をさらに展開し、個人の適応という観点から共同分配戦略が集団内に安定的に成立し得るかどうかについて、進化ゲームを用いて検討し、Kaplan & Hillの議論を理論的に支持する結果を得ました（Kameda, Takezawa & Hastie, 2003）。こうした理論的知見に加え、産業化社会に生きている私たちでさえ、資源獲得に伴う不確実性という手がかかりに半ば自動的に反応しやすい心性を備えていること、例えば、投入努力量が同じでも、獲得に不確実性が伴う資源は、他者への供給などに使われやすいことを、日米両国の被験者を用いて実験的に示しています（Kameda, Takezawa, Tindale & Smith, 2002）。さらに、現代日本においても、財産や教育背景などの面で、不確実性を個人的に低減する手段の乏しいブルーカラー層において、共同分配型の価値規範が強く見られることも明らかにしています（Kameda, Takezawa & Hastie, in press）。これらの知見は、狩猟採集社会に関する人類学的な観察が、不確実性やリスクというキーワードを通じて、産業化社会に生きる私たちの資源分配行動とも密接につながっていることを意味しています。

不確実性のもとでの“民主主義”

人類学者のBoehmlは、民族誌の分析を通じて、伝統的な部族社会における社会的決定の仕組みを検討しています。その

分析によれば、部族社会における重要な決定は、多くの場合に、男性成人の大半を含む合議体において下されると言います。同様に、近代社会においても、重要な決定を担う合議体の例は、国会や委員会はもちろん、枚挙に暇がありません。ちなみに、合議体という言葉は当てはまらないものの、集団生活を営むいくつかの動物種（例えば、ハチやヒビ）において、営巣地の設定などについて多数決型の「集団意思決定」的なメカニズムが見られるという知見も、近年、次々と報告されています。

それでは、なぜ、「集団意思決定」の仕組みが広範に観察されるのでしょうか。私たちは、集団意思決定が環境知覚における誤差を効率的に低減するメカニズムを、一連のコンピュータ・シミュレーションを用いて検討しています。この検討では、社会的決定の仕組みとして、多数決型の集団決定や、最優秀者による個人決定（「独裁」）など、いくつかのヴァリエーションを用意し、それぞれの決定原理の適応効率を組織的に検討しています。これらの検討から、多数決規則は、極めて単純な集約原理であるものの、さまざまな不確実環境における誤差を効果的に低減すること、意思決定理論の用語を用いれば、「早くて節約的なヒューリスティック」であることが示されています（Hastie & Kameda, 2005）。さらに、多数決規則は、これまで政治学で「投票者のパラドックス」と呼ばれてきた「ただ乗り問題」（例えば、「日曜日にわざわざ投票所に足を運ばなくても選挙結果はみな等しく享受できる」）を考慮しても十分に機能し得ることが、進化ゲームモデルと行動実験により明らかにされています（Kameda, Tsukasaki & Hastie, in preparation）。

「社会的な心」の生態学的基礎

このように、本拠点における私たちのチームの検討は、人類学や行動生態学の知見を出発点に、「社会的な心」の生態学的基礎を明らかにすることに向けられています。動物とヒト、ヒトと人、伝統社会と近代社会、近代社会同士の連続性と差異を明らかにするという大きな目標に向けて、人間の社会行動のどこまでが生態学的要因で説明できるのかを知ろうとする作業です。こうした作業を通じて、本研究プロジェクトのもう一つの柱である「心の文化的基盤」が真に問題とすべき現象群、言い換えると、生態学的説明という非常に普遍的で節約的な説明原理では片付けられない現象群が明らかになるのではな

いかと考えています（Kameda & Hastie, 2004; Kameda & Tindale, in press）。

経済学に「規模のメリット」という言葉があります。小資本では成し遂げられない事業が資本を集中することで可能になるという意味ですが、社会行動の意味を考える上での1つの重要な視点がここにあるのではないのでしょうか。「ヒト」が「社会的な心」を獲得することで、他者や文化のメリットを享受し得る「人」になったのだとしたら、そうした「社会的な心」がどこから由来するのかについて、その生態学的基盤を探る作業は極めて魅力的な作業です。こうした見通しのもと、私たちの研究チームでは、現在、文化伝達を支える認知の仕組み（Kameda & Nakanishi, 2002, 2003）、原初的共感（「感情伝染」）のメカニズム（Kameda & Tamura, 2005）、感情システムと規範維持行動の関係など、「社会的な心」の根幹に関わるテーマに挑戦しています。

文 献

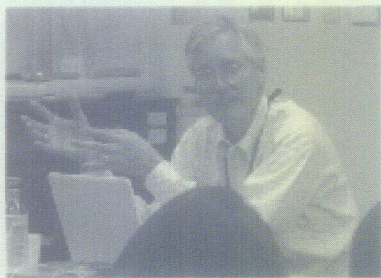
- Hastie, R., & Kameda, T. (2005). The robust beauty of majority rules in group decisions. *Psychological Review*, 112, 494-508.
- Kameda, T., & Hastie, R. (2004). Building an even better conceptual foundation. *Behavioral and Brain Sciences*, 27, 345-346.
- Kameda, T., & Nakanishi, D. (2002). Cost-benefit analysis of social/cultural learning in a non-stationary uncertain environment: An evolutionary simulation and an experiment with human subjects. *Evolution and Human Behavior*, 23, 373-393.
- Kameda, T., & Nakanishi, D. (2003). Does social/cultural learning increase human adaptability? Rogers's question revisited. *Evolution and Human Behavior*, 24, 242-260.
- Kameda, T., Takezawa, M., & Hastie, R. (in press). Where do norms come from? The example of communal-sharing. *Current Directions in Psychological Science*.
- Kameda, T., Takezawa, M., & Hastie, R. (2003). The logic of social sharing: An evolutionary game analysis of adaptive norm development. *Personality and Social Psychology Review*, 7, 2-19.
- Kameda, T., Takezawa, M., Tindale, R. S., & Smith, C. (2002). Social sharing and risk reduction: Exploring a computational algorithm for the psychology of windfall gains. *Evolution and Human Behavior*, 23, 11-33.
- Kameda, T., & Tamura, R. (2005). "To eat or not to be eaten?" *Collective risk-monitoring in groups*. Submitted.
- Kameda, T., & Tindale, R.S. (in press). Groups as adaptive device: Human docility and group aggregation mechanisms in evolutionary context. In M. Schaller, J. Simpson, & D. Kenrick (Eds.), *Evolution and social psychology*. New York: Psychology Press.
- Kameda, T., Tsukasaki, T., & Hastie, R. (in preparation). *Democracy under uncertainty: Adaptive robustness of group decision-making beyond voter's paradox*.

第5回・第6回

一般公開ワークショップ報告

当研究拠点において、2004年8月12日(木)～8月14日(土)および2004年9月16日(木)にそれぞれ第5回・第6回 一般公開ワークショップが開催されました。

第5回



第5回一般公開ワークショップにおいて、James Wertsch教授(米国・ワシントン大学セントルイス校)

による講演が行われました。8月12日には、媒介概念についてのシンポジウムが開催され、翌8月13日には、氏が現在研究している集合的記憶を中心テーマにした公開研究会が開催され、杉万俊夫教授(京都大学)、高木光太郎教授(東京学芸大学)による討論がなされました。最終日の8月14日には、若手研究者や大学院生を中心とした研究発表が行われ、活発な議論が交わされました。

* * *

主要参加者

- 佐藤公治(北海道大学) ●陳省仁(北海道大学)
- 仲真紀子(北海道大学) ●やまだようこ(京都大学)
- 杉万俊夫(京都大学) ●高木光太郎(東京学芸大学)
- 倉石一郎(東京外国語大学)
- 松嶋秀明(滋賀県立大学) ●刑部育子(函館未来大学)
- 當眞千賀子(国立国語研究所) 他約50名

第6回

第6回一般公開ワークショップでは、「子供の社会行動に関する進化ゲーム論的アプローチ」について、進化心理学、社会心理学、認知心理学、教育学、文化人類学など多領域にわたる研究者が議論を交わしました。森平菜津子氏(青山学院大学文学部)、佐伯胖教授(青山学院大学文学部)、および鈴木宏昭教授(青山学院大学文学部)により、「子どもの遊びにおける協調と対立のゲーム論的分析」、「創発認知からみる発達と発達研究」といった話題提供が行われました。さらに、当研究拠点からは、「文化と認知—分析的思考様式と包括的思考様式の比較と



という観点から」(増田貴彦COE研究員)、間接互恵性の成立—進化シミュレーションを用いた選別的利他戦略の検討

(真島理恵・行動システム科学専攻・博士課程)、「表情は伝染するのか?—日本人参加者を用いた検討」(田村亮・行動システム科学専攻・博士課程、亀田達也教授)といった発表が行われました。

* * *

参加者

- 佐伯 胖(青山学院大学文学部) ●鈴木宏昭(青山学院大学文学部)
- 森平菜津子(青山学院大学文学部)
- 安田順(青山学院大学文学部) ●小林 紀子(小田原女子短期大学)
- 岩田恵子(日本女子大学) ●亀田達也(北海道大学大学院文学研究科)
- 煎本 孝(北海道大学大学院文学研究科)
- 石黒 広昭(北海道大学大学院教育学研究科)
- 高橋 伸幸(北海道大学大学院文学研究科)
- 結城 雅樹(北海道大学大学院文学研究科)
- 仲 真紀子(北海道大学大学院文学研究科) 他

2004年度研究成果

(事業推進担当者による研究業績)

■著書

Irimoto, T. (in press).
The eternal cycle: Ecology and worldview of the reindeer herders of Northern Kamchatka. *Senri Ethnological Reports*, National Museum of Ethnology.

金児曉嗣・結城雅樹(編著)(印刷中).
文化行動の社会心理学 北大路書房

■分担執筆

阿部純一(印刷中).
認知科学
日本音楽教育事典 音楽之友社

Adachi, M., & Chino, Y. (in press).
Creative music making for everyone.
In S. Lau (Ed.), *Creativity: A moment of Aha! Hong Kong: The City University of Hong Kong Press*.

石井敬子・北山忍(印刷中).
考え方、感じ方の文化心理学: 認知・感情の文化依存性
金児曉嗣・結城雅樹(編) シリーズ21世紀の心理学3:文化行動の社会心理学 京都: 北大路書房

Kameda, T., & Tindale, R.S. (in press).
Groups as adaptive device: Human docility and group aggregation mechanisms in evolutionary context.
In M. Schaller, J. Simpson, & D. Kenrick (Eds.), *Evolution and social psychology*. New York: Psychology Press.

Martignon, L., Foster, M., Vitouch, O., & Takezawa, M. (in press).
Simple heuristics versus complex predictive instruments: Which is better and why?
In L. Macchi, & D. Hardman (Eds.), *The psychology of reasoning and decision making: A handbook*. Chichester: Wiley.

Ohtsubo, Y., Fujita, M., & Kameda, T. (in press).
How can psychology contribute to designing a mixed jury system in Japan?: Ongoing debates and a thought experiment.
Progress in Asian Social Psychology (Vol. 4).

Takemura, K., Yuki, M., Kashima, E. S., & Halloran, M. (in press).
A cross-cultural comparison of behaviors and independent/interdependent self-views.
Progress in Asian Social Psychology (Vol. 5).

■論文

Cook, K. S., Yamagishi, T., Coye, C., Cooper, R., Matsuda, M., & Mashima, R. (in press).
Trust building via risk taking: A cross-societal experiment.

Foddy, M., Platow, M., & Yamagishi, T. (submitted).
Group-based Trust in Strangers: Evaluations or Expectations?

Hastie, R., & Kameda, T. (in press).
The robust beauty of majority rules in group decisions.
Psychological Review.

煎本 孝(印刷中).
アイヌ文化における死の儀礼の復興をめぐる紛争解決、共生、行為主体
北海道大学大学院文学研究科紀要

Ishii, K. (submitted).
Does mere exposure enhance positive evaluation, independent of stimulus recognition?: A replication study in Japan and the US.

Kameda, T., & Hastie, R. (in press).
Building an even better conceptual foundation. *Behavioral and Brain Sciences*.

Kameda, T., & Tamura, R. (submitted).
"To eat or not to be eaten?" Collective risk-monitoring in groups.

Kashima, Y., Kashima, E. Chiu, C-Y., Farsides, T., Gelfand, M., Hong, Y-Y. Kim, U., Strack, F., Worth, L., Yuki, M. & Yzerbyt, V. (in press).
Culture, essentialism, and agency: Are individuals universally believed to be more real entities than groups? *European Journal of Social Psychology*.

Kashima, Y., Kashima, E. Chiu, C-Y., Farsides, T., Gelfand, M., Hong, Y-Y. Kim, U., Strack, F., Worth, L., Yuki, M. & Yzerbyt, V. (submitted).
Culture, gender, and self: Is women's sphere universally familial and men's sphere universally societal?

Kiyonari, T., Yamagishi, T., Cook, K. S., & Cheshire, C. (in press).
Does Trust Beget Trustworthiness? Trust and Trustworthiness in Two Games and Two Cultures. *Social Psychology Quarterly*.

Liu, J.H., Goldstein-Hawes, R., Hilton, D., Huang, L.L., Gastardo-Conaco, C., Pittolo, F., Hong, Y.Y., Dresler-Hawke, E., Ward, C., Abraham, S., Kashima, Y., Kashima, E., Ohashi, M., Yuki, M., & Hidaka, Y. (in press).
The message of world history from psychological representations. *Journal of Cross-Cultural Psychology*.

Maddux, W.W., & Yuki, M. (submitted).
The "ripple effect": Cultural differences in subjective perceptions of responsibility.

牧村洋介・山岸俊男(投稿中).
国籍カテゴリーを用いた集団間行動に関する実験研究

Masuda, T., Ellsworth, P., Mesquita, B., Leu, J., Tanida, S., & Veerdonk, E. (submitted).
A face in the crowd or a crowd in a face?

Masuda, T., & Nisbett, R. E. (submitted).
Culture and change blindness.

Miyamoto, Y., Nisbett, R. E., & Masuda, T. (submitted).
Culture and physical environment: Holistic versus analytic perceptual affordances.

2004年度研究成果

西原進吉・菱谷晋介 (印刷中).

触知覚による空間関係処理と視覚イメージおよび大細胞系の関係 北海道心理学研究, 25 (研究奨励賞受賞論文).

Ohmura, Y. & Yamagishi, T. (submitted).
Why do people tolerate unintended inequity?

Ohnuma, S., Hirose, Y., Karasawa, K., Yorifuji, K. & Sugiura, J. (in press).
How did residents accept a demanding rule: Fairness and social benefit as determinants of approval for a recycling system. Japanese Psychological Research.

Smith, P.B., Peterson, M.F., Schwartz, S.H., Ahmad, A.H., Akande, D., Andersen, J.A., Ayestaran, S., Bellotto, M., Bochner, S., Callan, V., Davila, C., Ekelund, B., Francois, P-H., Graversen, G., Harb, C., Jesuino, J., Kantas, A., Karamushka, L., Koopman, P., Leung, K., Kruzela, P., Malvezzi, S., Mogaji, A., Mortazavi, S., Munene, J., Parry, K., Peng, T.K., Punnet, B.J., Radford, M., Ropo, A., Saiz, J., Savage, G., Sorenson, R., Szabo, E., Teeparakul, P., Tirmizi, A., Tsvetanova, S., Viedge, C., Wall, C., Wang, Z.M., & Yanchuk, V. (in press).

Demographic effects on the use of vertical sources of guidance by managers in widely differing cultural contexts. International Journal of Cross-Cultural Management.

Takahashi, T. (in press).
Social memory, social stress, and economic behaviors. Brain Research Bulletin.

Takahashi, T., Ikeda, K., Ishikawa, M., Kitamura, N., Tsukasaki, T., Nakama, D., & Kameda, T. (2005).
Interpersonal trust and social stress-induced cortisol elevation. NeuroReport, 16, 197-199.

Takemura, K., & Yuki, M. (submitted).
Competitiveness in Japan: A test of the interindividual-intergroup discontinuity effect in a "collectivist" society.

田村亮・亀田達也 (投稿中).
表情は伝播するのか? 一日本人参加者を用いた検討一

田村亮・亀田達也・深野紘幸 (投稿中).
合議におけるパレート原理の頑健性:「寡きを患えず、均しからずを患う」?
(II)

寺井滋・森田康裕・山岸俊男 (投稿中).
選択的プレイ状況における信頼行動と協力関係:依存度選択型囚人のジレンマゲームを用いた実験研究

山岸俊男 (印刷中).
実験ゲーム 数理科学

Yamagishi, T., Foddy, M., Makimura, Y., Matsuda, M., Kiyonari, T., & Platow M. (in press).
Comparisons of Australians and Japanese on group-based cooperation. Asian Journal of Social Psychology.

Yamagishi, T., Kanazawa, S., Mashima, R., & Terai, S. (submitted).
Separating trust from cooperation in a dynamic relationship: Prisoner's dilemma with variable dependence.

Yamagishi, T., & Matsuda, M. (submitted).
The role of reputation in open and closed societies: An experimental study of internet auctioning.

Yamagishi, T., Terai, S., Mifune, N., & Kanazawa, S. (submitted).
Managing errors in social exchange.

Yuki, M., Maddux, W.W., Brewer, M.B., & Takemura, K. (2005).
Cross-cultural differences in relationship- and group-based trust. Personality and Social Psychology Bulletin, 31, 48-62.

Wang, F., & Yamagishi, T. (in press).
Group-based trust and gender-difference in China. Asian Journal of Social Psychology.

お知らせ

2005年5月21日(土)・22日(日)に、北海道大学学術交流会館にて、「日本文化人類学会第39回研究大会」が開催されます。CEFOM/21のメンバーである煎本孝教授(研究大会委員長)のもと、特別シンポジウム(「北方研究からみえる人類学の今日的課題」)が行われます。山岸俊男教授(CEFOM/21リーダー)は講演(「心の文化・生態学的基盤と人類進化」)を行い、両教授はともに分科会(「心の実験とフィールドワーク」)を主催します。

詳しくは <http://www.knt.co.jp/ec/2005/jsca/> をご覧ください。
また、2005年6月24日～26日にかけて、北海道大学学術交流会館において第3回数理社会学会日米合同会議が、日本数理社会学会とアメリカ社会学会数理社会学部門の主催で開催されます。詳しくは、<http://www.geocities.jp/rcusjapan/> をご覧ください。
この国際会議はCEFOM/21の共催で行われます。

21世紀COE

“心の文化・生態学的基盤”研究教育拠点



〒060-0810

札幌市北区北10条西7丁目

北海道大学文学研究科行動システム科学講座

TEL:011-706-3047

Email:cefom@let.hokudai.ac.jp

Homepage:<http://lynx.let.hokudai.ac.jp/COE21/>